



雜
談
集

上



雑談集

雲英

雲英

一伏んそと衣郷塔をよほされき赤子
うりりより芭蕉の翁の名句の連なりや
はらとるあはれけりおりの持姫と
久大津尚白亭と

幸崎の松を花より勝あへ

ともしれりこそ一句のそ尾言外は味
あつた人もあつた見のそくちなる
そくちなるもそくちなる

けりあるや。これよりさうりより中古
の類ケレサク化ケレサクありて是非の境ケレサクの本意を
ほそれし人さうして其句ケレサクは子誹諧の
骨髓にほれども怪なる切字なり。よして
名人の格ケレサク的ケレサクありさうの姿をもあ句
とやうケレサクやと不審ケレサクしける 答下
哉とさうのあ句ケレサクはあさうと句のあ句
を怪ケレサクしるありさうさうもほりか
と句ケレサクなるさうさ句ケレサクなりとさうか

さうりさうりさうりさうりさうりさうり
かさうりさうりさうりさうりさうりさうり
中の句ケレサク他ケレサクの句ケレサク的ケレサク當ケレサクなりとさうりさうり
弱ケレサクさうりさうりさうりさうりさうりさうり
あさうりさうりさうりさうりさうりさうり
いさうりさうりさうりさうりさうりさうり
初ケレサクのさうり根ケレサクのさうりさうりさうり
かさうりさうりさうりさうりさうり

一 宗鑑ケレサクハ生涯ケレサクをかうり

隱徳高く山崎の桑乃門あつても車馬の

喧カヒヒキなり一日も近衛殿 宇治へ道チウ

逢ヨリの以去は所志のりものことさぬ入る

りゆの瘦マセツカレ号し何老は降ゆりて庭草元

なまゝ一このほの世のこえよあかた

みりるさあま

宗徳くくもみぬかたなり

と作らばむと則

のほんやらはれそ其のはあ

とつらむらつせけるあめさ真ありけるなりや

元政上人の隱イシイッ徳傳より宗鑑の傳をへる

へあま此ホシソクワキ伝ホシソクよりくらしむる本心ありと

このそりれはるや一句一生の徳を無ナシ

けるらあるは一とある板をれも晝チウ寢シム

くせあのおもひ念せしむらふものも思

ゆらひらむらむらむらむら山崎の桑乃庵を

そのまゝ吉クツ登クツとは夜をのりてあつてよ

ゆらおもむき俗ソクなやういふの天狗下

成るに余年の月を月ありはねがと
八指の緒のありつをあらがひくも
多しをよめりけり涼 ^{シラケ} 涼 ^{あせ}
^{カト} 角ありし人をほりしものみだり
しをいかにしれしをいかにしれし
をいかにしれしをいかにしれし

一頁享し丑年九月十四日の晩の夢を
世にあらしむるをあらしむるを
首をけり若笠のあらしむるの



たかしのむのむをいかにしれし
若きつりしをあらしむるを
ついにれし社人あらしむるを
若きつりしをあらしむるを
ありしむるのむをいかにしれし
さゆを社人あらしむるを
ありしむるのむをいかにしれし
はしむるのむをいかにしれし

多きよしととゆめをほよ面白く
 みやうな松の葉まふの世井の信
 此のうらみなるをのちのうらみ
 りいれ

松原のよしをいふるはなる

中世のねを社人志なきを
 返してあはれなりけり
 うなるをいふとおほいなる
 十五日の乾涸川の八幡宮に詣る

吹く芭蕉庵をきくありて
 けりといひをれと現^{ウツク}を
 をあやうし^{キヨレイ}とみ^{フイ}
 あはれ^クともよ^ル虚^{キヨ}霊^{レイ}不^フ昧^{マイ}
 一荷今集何の世より辞世とあり

守武

は集のあやうしに神祇の辞世とあり
 けり境をよめるにや只鳴呼と歎^{タシヒ}
 こころがとらむは花苑の

一先年上京の時掛抄ノ下

李吟

目を志やけぞむ志けれら庭れと

なんぞりあふみくせを^{ツウイン}遊音の句く

一五十句百句とらつる幸北野梵灯より始

一西岸寺任口上人のこんとくニ牧

草はしく川あも荷よ花枝が

蓼醋ももち海原をさるらん哉

伏見まゝくも元ゆるきの敦京へ物もそ

箱荷山あゝいあゝとらさぐこれえらす

うよあゝいんをさあいやそわらぬく男

けーとくうらせりるま程人のひろひそ

丸のまれ藪根垣みそこみそあり海牙

ひろへつこいひあひりらとくはひそ神を包

けらうれ短尺の^{デウ}杖の上は男山正八幡

大菩薩と仇書せしはあそりりもあは

内をえんけしやがひ垣下をさるみそ

控らん只神名のりうくしうあや

旅はくあ人も心なあ

一さみぢきれけりぬあきのや勢田のそ 翁
 けしきの名たるこの名はよきとて矢矧ハキ
 のけしきもやまも長橋の天よりかゝる
 勢多一橋よりかゝるけしきと雖もけし
 京大津よりけしきなるけしき去来り

湖のあもさるけしきりさるる多 也
 云へるゆきけり湖鏡一面よりけしき水
 接セツ天とみしぬ八景をさせツけしき一
 橋をさるけしき時と云所といひ一句よる

をけしき景物のけしきなる場をけしきみせ
 るけしきや文章のみよのよあづけしきと云る
 警者コトバのけしきけしき

一る小玉けしき御のけしきと云るの三句を
 みとめいづれけしきと云るけしき

けしきや壙ひけしきけしき月乃夜 也
 りけしきをけしき定けしきと云るけしき
 去るけしき人目みせけしきけしきけしき其
 夜の月れ天心けしきけしきけしきのあけしき

かななりと悦びよされたりふれを友吉り
さしし花の月ハ四角の形なりなり
とらふハあささき月ハさき
鈴鳴りけりも鈴甲一さきれり
うれぬ鳴りけりもさきけり
一うりさきの猿子立ちて毛先おひ合
れる川は寒きふきなきこけり
暑^{シヨ}も寒^{サム}もハ俊成つ^ニの雑談
出女や一疋なげを蟬のまき 自悦

一あはれを挑のげあま心うつらひ安位
毛覺つら形と上地の様みよありし
ま門主例なきはけしきせねむ山ノ氣
さしと閑なるもむらさきもやとん
うららん殿の底も志あやうなり此
定^{シヨラ}ざりし日は子らるるうらなまなせ
亦とあはれも心づつらむを真をく
あはれぬあまあき風さの私あひうき
大師の師^{オカ}を法^{ホウ}あり此系はるるあはれ

うらみの縁りる年 彼らさくらのあははほく縁
臺の右に方よ種うけりり行松はさか
時をさくはけりりよかころびざれを

焼りけて煮るも雪のころころ 角

入おとせのしほくく門を薨降のうらさ
あましく鳴物とがめをせぬを悲をいざや
うは日くはあありくくハ世をささめか
あめともとも佛身非情草木あつた
まはりのみこころはけりりあめと愁眉はけ

いふもさき流ゆり

具届とりの二目くやふさく 角

一其去り多よかありくく山のたきまひ又文

小ぢきやねまうくわく山はく 角

香燻くろ茶ゆま様のとまきり子 普船

くもは目を一目花よ思まじたり 举自

はそくもわくむく路く 靴の片 浮萍

物たよりさくく投こあ抱山暮 亀翁

むのあ小蛇情うか 水花

嵐蘭り母と田中宗文と云く一人の孫とて
りの家文の成功とよく知く河野の孫り
初筋巻田の田文と云くけし申るふり存
松倉忠房守の赤老と云り信るこれ
子孫り信る河野のふ士ハ其の上と
しつれ田の畦とて死へしとて此の家訓
として心とて色かり懐舊

死と云ふ秋穂けお小田の歌

一知筋令沃の一矢いと云ふ御筋のかけり者也

嵐蘭

あけ脚の形お宿と云く遠く心と
まをこびるふふ年とて重労働のま
跡を今とてさるもひとてさる文
の子三田のあとりてさるの御階色すと老
孝居るふとて思ひ立けるとて息
もさるゆしにけ親のみちとてさる
とて男のうとてあんなとて氣げとてさる死
とも物とてさるうとて五とて仙出もぬれ
筆とてさるうとてさるし知とてさるを呼と

カタキキ

ありとも行やまのへ後さ形く海宮
 くれも我形くもけくもえけくもあひ跡
 せあささなりとけひの眉さくもさうりて
 心く雪くほくく西のくき一笑
 正念とけくく望年の新あを越
 の白根をさるるるるく松くあけ具
 餘哀をさりくもれくる
 塚もくくけ我伝、色を社の風 翁
 常夜の蓮そあり心あきの風 何夷

我はくく啼せく 社の石佛し列
 月すくく魂あを此あり 牧童
 つま啼く家ハ泣くや塚のく雲口
 白鳥身跡ハく 遊女あきく揚く紫
 るりくかきくもなくくふもももあも
 らびくそ折をきくねももなやうわく高
 きの席をくこれあ入もあわく変をぬる
 さんかりよるねん存さるがれあく志れる
 くとくくくあきくもくくくく

これをもとにうづくもかきまにひくもて
あつらんあつらんやあつらん風の森なること
りの地よりまを投^{ナゲ}げたるのぼるりと
茶砂^{チヤサ}くくんとくくを付く

とあつらん茶砂のまをまのた鳥跡
とを十とまをのめあつらんやあつらん
とを一向のまをのめあつらん入果^{ニシク}よりかかれ
おつらんまをのめあつらんまをのめあつらん
讚^{サカ}佛^{ブツ}衆^{シュウ}の因^{イン}をうづ

一山川といふ世^セ稱^{ショウ}七^{シチ}のまのぬれもいさぶる
とる見合せあつらん志^シ他^タなく予^ヨう一^{イツ}癖^{クセ}もどわ
くれをるまの及^{ヨリ}故^コも持^{モチ}ひくことよ物^{モノ}が
彼^カ花^ハつみといふ集^{シブ}ハやといふ清書^{セイショ}なること又
依^ヨりまといふりしるまといふこと回^{マヒ}をせは古
詩^シ古^コの孫^{ソノ}子^シ叶^エはるも筆^{ヒツ}よあつらん具
カを孫^{ソノ}子^シ葉^エはるまといふこと勤^{チン}めて困^{コン}あつ
るれやといふ家^ケ宿^{シュク}ともあつらんことおれや
の文^{モン}緒^{ショ}はるまといふことおれや

風といつてきつても 君の門 山川

火燵くぐりて 紀伊乃樂 角

傘さして西へぬ 吾もあはれ 溪石

在所を近く 葦くさ 山川

傀儡の肩子うけたる 如ほり月し

ふりりのせて ちね 今

一院を形見といへる 重高のきりや 袈束つ

くほひく 鏡の面をひくはる

新けり 似ぬ 姿なるとも ころか 沾蓬

室生

一家を賣るる うち 粥よと 盛衰セライの至誠シニシ色

よもれり 負物カヒいへ ぬ 兼て 八風雅とて

も人おとす 白炭とて 忠知り

我身にあつた 男の 乾法師と

辞世して 腹切ける 信世

みまぬ 善く 忠知り 子

やうに 小物コモノを 見たり 又十年

東の 船着の 舟を 志れる 舟

元日 何もの 忠知

双たや世のよきもんやあは目あしよと
ゆづもごとくあはしき世あはれのこと
らんらんひ定り死活の境未だ記し

家とを秘めくせりさり春澄

皆人を雷を火一物といふ徳り同

や自暴自棄の足あぢやあはしき白も教

しきの白あぢやあはしき朽塵あはれは

松のそぢりう木のうづなはしきあはれ

聖徳まぢける徳潜の罪人あはれあは

とちそのを虎もあはしきあはれあはれ
利の境もあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ

一閑見月

あはれあはれあはれあはれあはれ

名月あはれあはれあはれあはれ

難回花影乗月上欄干此白の思ひ合は

あはれあはれあはれあはれあはれ

夜の涼しあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

おぼろぐ松の黒い月おろふ 角

光廣つゝ家の月ハ嵐ハ庭ハ心ハをトよシせ
おろぐかもしよみごまふとあとも春月の本
ま六ロウ腫ハくハうハはハるハ新ハうハまハことハ作ハり

終々津義仲菴

三井さの門やうさうやけの月翁

其長も思ひ合はるるも名月ハ子ハ節ハるハ月
をハみハるハちハりハひハおハもハなハくハ物ハくハのハ口ハ竹ハ算ハまハ切ハ字ハを
入ハるハ多ハ分ハをハ繪ハりハりハ傳ハるハをハおハさハとハけハり

名目や草のしゆりのあははぬ 海邊

元舟カラのしゆりあもな月ハ元ハ仙ハ化

月ハ代ハ飛ハりハあハいハさハおハ合ハ入ハ厚ハのハ家ハ 龜翁

海ハりハまハ野ハ中ハもハひハりハりハのハ月ハ 普船

名月ハりハ是ハのハしハみハるハ乎ハ海ハ外ハ 未陌

そのの月ハ様ハりハあハとハ執ハ筆ハ外ハ 遠水

一知者仁者の山ハのハ樂ハ心ハのハつハるハとハらハりハりハ

と向ハまハるハ是ハをハくハとハ斗ハ花ハのハ芳ハ披ハ山ハとハらハりハ

先ハのハ自ハみハりハ一ハ種ハのハ毛ハやハりハのハ真ハ室ハ

いふのほしき 暖海の熱くひよ熱き 同

富田川は百もさしなむ琵琶を負
枕をくえく力を風をしまつたれも實
海一ふらふちしし短尺を買とて未
船の櫓をせしむ船力ともなほつたれ
き山麩堀亦持のりけものなり

借錢の淵をくつまぬ氷の如 眞室

かきみけをみひきしきさるる

極りしサセり

いづれなりししきさるるいづれなり

一鉄炮と云名のありけりなむ句傳ふあつて能
おむみ付分けて案はるる太巔和尚の百
部詩と 人間事負悲猿境 辛苦管中多少淚
と傳ふなり是ハ伊豆の山をて猿師の猿をみ
つて鉄炮を丸上りし哀猿判腸乃色を
出して叫びしと云即眞の詩なりしししし
りり辛苦管と云へも則鉄炮と云ふも
細路をさしし自由のあつてくは思ひ
けりしなりし餅と云名の面白くししは

十七字のゆらちてくひうゆきとて初懐席

餅作るちうの廣葉をこしら合せと

これほまはる他あねも鉄炮とてしよる他

ちをのみまりくやされはるほと他うて樹サハタ

あふりのなきー定あつるは花梅あつる

ほちありーもあつるーいーはる

いせの雲の目さるまのをのうみは舟ののせてい

とていよこらせて出るこしとらうあまてはる魚

ぬすむそのの子れ乳をさむてはるの座子や

おるおやぐてうみかきイキもあつる子カ

あはさるんて乳房解入てまごらみさる

ねゆととに仁心の發動ハツトラせあ所かれも一白

あはるこものいことあの報徳をさる

これとあつるあ

こふとあつるあ

驚の子なれを舟し乳をのむと付

これと三才ツイ圖彙の繪をとみるあ

一るの賞もあつるあ

時の真一おかしういふを色一ぬ尾張は
 さまやうに結ぶびぬめあつたるとまのを
 付合せられぬれ禁国は雲のいさよに造りあり
 っしとましんふ心も味さびらるおろし
 うたひし皆御宿の眼を付くはまの目とよ
 五方仙のいひづらまじり
 何勢よあつたは幸遷宮は良材ともぬて
 ちと連のえくふ新や井の糸 角
 水のよしとまじり

ちと連のえくふ新や井の糸 角
 水のよしとまじり
 何勢よあつたは幸遷宮は良材ともぬて
 ちと連のえくふ新や井の糸 角
 水のよしとまじり
 何勢よあつたは幸遷宮は良材ともぬて
 ちと連のえくふ新や井の糸 角
 水のよしとまじり

男を物ニもさるるのこゝろみくらびの松あまよ

けりあまニのこゝろみくらびの松あまよ

かんもも子揚梅マキモの實ササキむらう一口梅翁

四十もや乾菜ノの糸ノのいそうや嵐蘭

年もあも梅ニあまのあまのの暮東順

戒カ在レ色ニとりの所をよみまて

錦木也色のをりりの老男是吉

力なや麻刈あまののあまれ風越人

候暗よ師是の菊の歌あまの露沾

老の男の凍もあや梅翁のを 岩翁

紙子あまのとりの也紙子も三十八角

去レありける也とりの也

百夜う中一雪のおおとる

を付く恐の字れんまうく先とると自讀サレ

やげるも猿叢の身信々あらうのとる

とるもあらう

うお世のとるを皆小町とるあの

るもあらうのとるの也とるあらうの

日この憂うれよりんが時のちの人情人情すつてをらるる
もの衰病衰病すつてをらるる境界境界よりあくる血氣血氣
を流してけしむがむとさほろハ平ら血氣血氣
合ぬまらるのあつてもあつてけしむるもや洗
口瘰瘰いりよ愈愈一也いよ

一なると付らるるちあつてもあつても敷あつて人

鼻紙鼻紙を扇扇りしつよサく水 信徳

是ハ益ほりあるうたむとさほろハ平ら血氣血氣
のちをせなるも新新とあつてはま練練なるはる

何舟何舟やみなうへへあつては 芦芦のちれ 亀翁

これと吹さす付合のちなるを二つは優優ありて

あつてあつてせしきなるこれよそあつて舟工舟工ま

よあつて響響ありて執向執向よりける人かすて

あつてあつてゆきまき一人思ひあ多一此

比信比信あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

名月名月とくを響響せあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

今年就中ハラタツタフ陽先ツタフ断と白民の年を悲しむる

ふのりありて信極う老の後あるは

痛く連ぬれおとひあやうとておとちて乾ぬぬ

て断りて返りてこれららのありて御りりし心を

ふらひあるやうに笑ひあるハ陰氣陽氣の問イダテ

りの浮ウキ沈シヅミのほつらありコト莊子シテ陽の字を喜ヨシ

陰の字を悲イカレと訓クニせしむる氣のさびぬは

夜 九多イひ 新ニくも 月ツキの 七シカ 翁

如ニくしむし家や氣キひひられん 角

且 新ニくのみ心ココロくもし 物モノつらき 仙化

七シくもやあやうとくく 乾鳥 角

昼 晴ハレひやあ山多暗カクき 昼下り 肅山

白雨の目メありひらきくく 揚水

暮 やり羽ハネ子コ長ナガたりり 日暮ヒツヨか 龜翁

目メを後ノチとくらぬぬを梅ウメの末曲ノチマカか 柏舟

おのりてを流ナガるゝらんともぬ 文をく

乃思ヒせめて新ニくく 乾カんく 乾カんく 乾カんく

あやうとくく 乾カん心の動ウツク静シヅムひひけて分ワか

の新^キ歌^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

小男鹿やほろふま^レ流^レ角

とやゆるれり^レ百里う^レ物^レし^レ木^レ曾

旅の新^レ世^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

かよふま^レ流^レ角^レの^レ水^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

是^レの^レ世^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

あ^レの^レ世^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

景^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

あ^レの^レ世^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

一發句付句ともよむるのいふ^レ世^ヲを

歳^ノ扇^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

あ^レの^レ世^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

持^ノ扇^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

あ^レの^レ世^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

あ^レの^レ世^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

西岸寺

大^ノの^レ月^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

あ^レの^レ世^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

葉^ノ且^ノ帳^ヲをばほしき世を^レ此^レの^レ世^ヲを

うつくしき竹の枯たきをわらふもあらず荷今
竹の葉を色に合せしと葉のくさば古秋のまよ
きしりく成りてあふまに云とれあしむも
初春の菽のくさのれをさるかにも氣を付らる
こつよ作意ありれも又氣を付らるあつ夜
こをを成りて朝にさるかにも己合處
こつよ人のけりまらるまの句あつ一定あつ乃
まのけりまらるの掃こをもけり恐多
一自性といふは

安心の傍もろくや 殊のくさ 秋風
成傍難くは安心の上の悲風かゝる先社
のくさといふは百叶と。あつな。やハ休め字を
悲といふは物我の^{モツカ}くさあつ天地一己の
自性を云ふは花の葉月雪あつはのあつり
成安の心にあつて下知のまらるの旗あつは傍の
心は初春の見いふはあつはあつはあつは迷
悟の理ありまらるるや僧団口
一なまをく福の糸をねりて七くつをを

中よ大黒殿をいじりしをせと格ひら送り

を神く格の口めく小櫃なる用

一ひ月三日の曉巴山りま子衆前懐シラツフをを河る

川つて進つ松をくハゆる前り形今

一以比落箱の歌よりあたる合徳判

州一松をよのうるもあらわす 兔翁

庭々の卯カイふみよく一落袖カ角

雞をまぬ時よとあまて持まぬわうの卯

合セせて穿セ良しよとぬ時よく叶イてくるの辨を

多のり鶏といるるがと宮とくわ切と執向の

狂へる所を予り未練とや世のうらまゐる鳩

鳴りつはの鴨りまも全柳の形容くく律な

ま向なる木兔ミツツなるぬ山居イれ子英

茶の毛ホシロ一昼眉イセてを色縁イセ柴牽

鴨尾なるやうつありむ抽り尾野水

一帯初とまむを案してくぬきくこと秋のるれ

付合よらかりくぬ思を付道たのこ付下

それぬくかの乳キカウの中へ

中よ大黒殿をいさめさせと栲ひら送り

と神々栲の口めく小栲らな 用

一ひ月三日の曉巴山りまの衆前懐シラフをを河る

川つまへて松をくひゆる 前り形 今

一以比落穂の衆あうくあたる合 法徳判

州栲るまのころるもあらわす 兎翁

庭々の卯カイふみまうく 落穂下 角

雞をたぬ鳴とあまてして持たぬまのあまの卯

合セシて穿セシ良しすいとあ鳴よく叶アてるの辨を

まぬら鷲といるるがく宮とくわくと執向が

狂へる所を予り未練しや恐のうらまのあまの鷲

鳴らうけの鷲りるまも全柳の形容くく陣な

ま向なる 木ミ兔ツあふぬ 山ミ居ミられ 子英

茶のむしホシ眉シロてんを係イセ外イセ 柴イセ牽

鴨ミかミくミやミらミうミあミらミむミ 抽ミのミ路ミ 野水

一帯初ミとまミむミと案ミしてくわあミうミくミてミくミ秋ミのミるミれ

付合ミよりわミかりミくミおミ思ミをミ付ミ道ミたミくミ色ミ付ミてミか

それミもミあミらミくミかミのミ紀ミ比ミのミ中ミへミ

乾家也 指^ニしんらふ海^ニしんらふ浦出

これに自^ニ然^ニなるものなせしむるを^ニ又

と^ニつゆ^ニや^ニな^ニら^ニる^ニ玉^ニ不^ニ梅翁

と^ニ観^ニ念^ニの^ニる^ニし^ニん^ニけ^ニん^ニい^ニろ^ニん^ニと

石^ニ菖^ニの^ニあ^ニる^ニを^ニ枯^ニ家^ニや^ニあ^ニる^ニ粟^ニ角

雲^ニと^ニを^ニ似^ニて^ニ似^ニせ^ニり^ニの^ニ也^ニ草^ニは^ニあ^ニ幸^ニ水

と^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

自^ニ然^ニの^ニ基^ニ石^ニと^ニあ^ニる^ニ菊^ニの^ニ花^ニ角

あ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

一今^ニ下^ニ都^ニ譜^ニの^ニ正^ニ風^ニを^ニあ^ニる^ニれ^ニん^ニ心^ニの上^ニに^ニ切^ニ色

か^ニの^ニ何^ニの^ニも^ニ一^ニ句^ニを^ニあ^ニる^ニれ^ニん^ニ心^ニの上^ニに^ニ切^ニ色

是^ニの^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

只^ニの^ニ心^ニを^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

論^ニの^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

吉^ニの^ニの^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

人の^ニ音^ニが^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

せ^ニの^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

を^ニた^ニ固^ニ宗^ニ因^ニ一^ニ句^ニを^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニも

時代^{ニキ} 藤^ヲ 繪^ヲ の 聖^ノ 地^ニ の え ち 秘^ヲ 藏^ス せ じ ゝ 文^ヲ 音^ヲ と 七
下^ノ 地^ヲ 濂^ル お 子^ノ 念^ノ の 入^ル ざ ら 元^{ハケ} 中^ヲ ず じ 取^ル け 今
何^ノ の 母^ヲ あ ろ じ び 當^ノ 時^ノ の 信^者 け ら 色^ヲ ば ぼ して 誰^カ が
念^ヲ を 入^ル じ 業^ヲ せ じ 十^ノ 歳^ノ の 信^者 も 至^レ 望^ニ じ 時^ノ の 用
ろ じ ゝ 入^ル じ 執^ノ 向^ヲ を せ じ け じ ゝ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ
う ち 信^者 け ら 食^ヲ じ ゝ 入^ル じ け じ ゝ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ
さ じ ゝ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ
彩^{イロト} じ ゝ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ 入^ル じ
形^{カタ} 一^ニ 方^ニ 寸^ノ の 器^ヲ の 一^ニ 也^キ 大^ニ 事^ノ か じ ゝ 入^ル じ

一 名翁父子の... 大の捜島く... の...
心... の... の... の... の...
あ... の... の... の... の...
真... の... の... の... の...
と... の... の... の... の...
夜... の... の... の... の...
あ... の... の... の... の...

ほぐしきりるものさへくみかひし

品川

と氣晴くり品川海乃ききの月
入舟も出船も寝るる水の色
品川の連もあつり一鳥の聲
具角

阿波

初草をほほくさつあつ宿綾
おらあつり一寝をえはく殊の石
尺牘

狸谷

ほろやの夕日やほろりしん瓜
飛ぬ

夕飯

箱塚のつらつらつ〜田守ハ
氏角

家伝

宿とつて東をとのあきの月
今

舟のくれ鳥ヶ宿のひ梅が
まゐ
を誰や火の世の相蓮華
入中

田村川

たつと〜二橋あつる舟のつら
岩翁

追落ん 點のよもみや石れ音 横儿

市子

おらあふあふらさふらさふらさ 落籠 子あ

立木の葉や折の夕るれ 小 岩翁

伊勢原

吹箱田の繩はらるる本通り 遠水

横平やまをたれしの蕎麥畑 子角

御向委

まじくぬ片むらみ松の日影 小 岩翁

柿賣やむらみ松の下やうり 龜龜
生原を握りつらむる山新 小 具角

大山

麻やせつ餅ふみ犬の毛並 小 壺水

鵬押やうらむ岩根らるる 小 寺角

石叢

山翁 五石 千策 洞
門 遠 新 川 一 筆 派

ろくろや房らう下る傍の形 龜角

春氷もあわゆる此の沃 小 且水

ゆき 小 茶瓶やまて 小 苔の 小 寺角

舟に水川しつるもさの橋を水

二間茶屋とく

花もくろく丸も旅路や木植垣 龜取

白雲の尾髪ゆさるすまふ 寺角

まのし

相撲とるあこし波さん砂場外 龜取

磯のふる月を酒をふ所 繪 未陌

七尾濱

新酒くむ山を志とるく磯の上 龜取

由井濱

名月や海ははくく辰葛 岩翁

新方く一の華表や波の音 寺角

雪の下やうらま

さみ寒し風呂を焼かる 里の 龜翁

水くつ宿の庭子や茶の冷仕 寺角

二つとろ場より味や多ふ北のふる 岩翁

旅の炊にまきかや鐘の声 横儿

とろ岡 奉納

七尾

其幹ミキや 根杏うらみ 千枝の枝 龜翁
草花より 根金山の目次 尺中

松岡

此丘を所の 材積を 増す 社の 為 斗着
ク 小定ちぬ 小流よこ

彼の子と 柘榴こぼり 膝上 岩翁

離山みくろ 籠

り 乃ちも 刈田乃 松の 干割 小 全

箱塚よき けちり 乃ち 何 亦 横儿

月次抄は 今 文 通 見 圃 記 也

平日 如 志 乃 の な ら ぬ 臺所 枳風

海を 乃 歩 乃 乃 ゆる 乃 乃 乃 乃 乃 岩翁

あさ 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 同

樂人 や い つ 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 遠水

摘 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 龜翁

亦 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 荷分

梅 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 如春

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 撒士

白臬也 漁翁り 齒牙ハありあつる 東吹
青海苔やー ぼよあつる 磯列松 尺艸
ー ー 木等ともなりー 指柳 春水
出らぬ子も通り名付子 甘の存 岩翁
岩中 藪よりー 控ふる あつ沙 鉄枝
ー ー 舟の 既トモリを せせくる 曲水
うーのすま ありあつる 蟻 其角
妹此子乃もあつる 東タタめる 葎り子 キノ
木面を ぬりー ー の 旅り 邪 遠水

うけうのう 隆子うけうよ 金屏風 普船

尋ね 二句

極木の亭の亭るるはこ 花いすの 其角
よき犬アは 極木の亭の むさり 揚水
花ーや 苗代 軒子 あつる 他 仙化
一 歌子 一 庵とけや 夢ろろ 春水
星出る 明日の花 元乃 三つゆ 横儿
山あつる けりつを 走れ 白ひつる 仙化
あつる 山と せつと へん 門 けり 山と けり 枳風

名大やむらひちある系さくく尺艸
心ほき花見のつゝやお撲たり嵐蘭
逢きそものちりまきりつ逢桜山川
紙屑や所く子かきはくく柴車
車まきく花見をえまきく東山キ角
子雪の師を車座や花の兒嵐雪
我目よりあつゝ山の櫻哉翠袖
出ろりの間や何そよ多の時浮萍

かたりの記

いつきりくく裕りりり人乃成
羽をながく寝さくあまの衣く且水
不斷着るを故のや衣更キ着
引さけく思へん車くころあく横儿
此雨をどくくあまをほめきん翠袖
櫻の花こけりくくおのよん仙化
六河廂院うけくくあまのあまの寺角
上り場をあまのあまの角田川キる

露沾

青麦の 奥と昼なる鶏の声 沾徳
青柳やをのうウツホ空子あるまて 岩泉
夕りあハ鳥のなぐぬ長ぬ介 普船
片々んつ是も 船を画舟人 寺角
ささねおむすむ分りり 縄巻 寺角

洒落堂 頽破

舟のうらやま紙へぎるる登の祇 翁
箱根峠をくりまてく絶く

妻人をサ貫目乃あつさか 柴栗

らくくうりニ心を 涼み糸 高佐
此松よりくは風ありな色涼三 寺角
中日を乾篠子あぐぬ暑さか 蓬仙
白雨ややの黒りし酌のつや 普船
ゆのつらけり日透さく曇故 揚水
帷子れお力やなぬ女むき 岩翁
舟とほむさぬはさ 舟
舟遊 祭もりの牛の足 幽也
番付をうらもあめきほふ 寺角

わしたる母てい花下子染めのかさ^{角豆} 亀翁
法橋や尾付替し雨あがり 被童
石塔中折くみ入る淵の鯉 去来

花紀

指ぬれる鳥をいづ蓮々うら 子母
空合子あるよ祝の目利は 是吉
内井戸のおよあひかり 煉經 普船
いなるるや国の院より物うた 少花

霊板のほけけぬき下蓮うた じ
舞や人より調うく盆より春 其由
鬼灯やうつろよ子の口の中 青楓^{三島}
唐鞋の色の中なる小松小 浮萍
るるも下りて引はる花燈り家 探泉
破うつおよ子とあり 九利^{キ、この} 幸水
鳩板のほむくも胸の赤三^京 史邦
けつ雁やうらあき花筑波山 青楓
名目や流以起次森乃鳩^ぞ 弥碩

名月や夢もゆるる女男の夢 巴山
約そく之邊城よりハ行義あり 正秀

本号海より
あこやや出く

めりりや山を離れく星の礼 百里
このさぬハ海田もぬ栗山みか 全峯
後苑とふはつけてその白髪亦 樂宇

貝片くらの
影さくうら

赤貝もよとくる赤庭のきり別 揚水
淡柿よりくまて深し枝か 兔株

草花もよまけるるのとまらふ 全峯
とつ草のくまらり朽る月陰も 佑蓬

花子

去る菊の四身子あは小社下 溪石
けりくはよ垂つかえり色り 幽霄
氣をりけてる花の夕う飛 松下
胤登いしく折りし秋の巻 普船
深出を人あかきむぬあか 九十
飼鳩やよとくもゆるみ煉の昏 水刀

うづねの申すはくく茄子くくこの一山

神の末をほろむるやほの目 仙化

はくく子孫千々まきくくやおの月 才菊

おのり歌

はくめしつをせむるくあ人酒のうん 撒士

と未未の白文をせむるわら

はく雨くく酔やのくくして村めくく 才菊

とささのくくをくくやきくく一巻の
そく屋とくくのみくくよりのみ用合くく
まはむくくとくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

此社れ溢ありやらくくくく 粟袖

一めあう母てやあの中くくく 探泉

少あくく隣くくく傘乃音 嵐蘭

あくくのりいさりて事のはくく 彫棠

あ川や後のかすりるまのく 牛角

鴨くあも一筋をよきくくか 沙花

とりくくく殺の威をんる雲くく 亀翁

川筋の遠くを曲る指地くく 岩泉

風くくく優々日のく 糸三翁 三翁

物くくく洗ひくくく村めく 蘭風三翁

每義仲庵を出入りあり

風や襟まくらゆる衣襟敷のなる ど 牝玄

葛の葉のつらきとてくらくもはれぬ 翁

ゑの氣を鼻みりこむぬ この 春水

思の中 脚敷なる火燵哉 日 一澄

嘯とて火燵に藤入の産りな 岩翁

たるまじくは巾やゆを夜のみ 如春

目まくりを氣まはる巾のほせ 子角

ぬるをたをるもの 遠る

炭焼のひやりとあんな釜の際 子角

袴足や子の草履ゆる就心 子堂

つよあまをねあまをぬの燵 全

人形や霜月比叟 其由

竹 目の畫

竹青く日赤く雪の墨のくほ 素堂

笠 重 吳天雪

我雪とあまのく 其角

千鳥はなれぬ 松風

し列東のりみち

つととゆへ見子し猿を不二の雪 智月 母

雪りと乾炭の起し世々の内を 詞山

美新なる神楽男の神あか 柴栗

志ぬき色こそくぬりもの友 野徑 ぢ

りのを子節あけりか夕日うさ 季先

世か一色いともまてこそがうめ

小形板たけくながん年の暮 其角

元禄辛未歳内立春日筆納狂而堂燈下

やうきまの紙類

